



ミャンマー連邦共和国

派遣期間 2014年3月～2017年3月

在ミャンマー日本国大使館附属 ヤンゴン日本人学校 実践報告

登別市立緑陽中学校
教諭 市橋良浩

1 ミャンマーの概要

①国の概要

アジア最後のフロンティアと称される「ミャンマー」。正式名称は、ミャンマー連邦共和国。東南アジアのインドシナ半島西部に位置する共和制国家です。独立を果たした、1948年から1989年までの国名はビルマ連邦でしたが、天安門事件を境に現国名に変更されています。



南西はベンガル湾、南はアンダマン海に面する。南東はタイ、東はラオス、北東と北は中国、北西はインド、西はバングラデシュと国境を接します。多民族国家で、人口の約6割をビルマ族が占め、他に、カレン族、カチン族、カヤー族、ラカイン族、チン族、モン族、ヤカイン族、シャン族、北東部に中国系のコーカン族などの少数民族がいる。6割を占めるビルマ族が用いるビルマ語が公用語として用いられているが、地方に行くと通じない場合もあります。

ミャンマーは、全人口の約90%が仏教徒で、いたるところに仏塔（パゴダ）が建てられています。仏教に次いで勢力のある宗教は、キリスト教（約5%）、イスラム教（約4%）です。ミャンマーをはじめ、スリランカ・タイ・カンボジア・ラオスにみられる仏教は、上座部仏教と呼ばれています。日本にもたらされた仏教は、大乘仏教ですので、同じ仏教ですが、上座部仏教は大乘仏教に比べて戒律が厳しく、修行のあり方などに違いがあります。男子の仏教徒は、一生のうちに少なくとも一度は僧の生活をするのが望まれ、実行されています。男の子が7歳～10歳くらいになると、親は子どもを僧院に預け、僧の生活を経験させるようです。1週間から3ヶ月の修行の後、再び元の生活に戻ります。ミャンマー人の仏教徒は、「仏・法・僧」を心から崇敬し、家庭にあつては両親を、学校にあつては先生を敬う習慣をもっています。このように、仏教はミャンマーの人々の生活と深く結びつき、人々の日常の行動や考え方にまで深く影響を与えています。



キリスト教は、主にカレン族・カチン族・チン族などの山岳民族の間で深く信仰されています。また、インド系ミャンマー人の中では、イスラム教やヒンズー教を信仰する人も多く、ヤンゴン市内にもたくさんのイスラム教寺院やヒンズー教寺院があります。

1988年以降は、市場開放政策が推進され、民間事業者による農産品の輸出入の自由化や、外国投資の受け入れ促進などの措置がとられました。1988年10月、それまでの経済面での鎖国政策を改めて民間貿易ができるようになりました。民主化により拡大の兆しが見え、1990年後半から第一次ミャンマー投資ブームが起きましたが、その後欧米による経済制裁で再び経済が停滞しました。

しかし、2011年ティンセイン大統領のもとで民主化が加速され、現在第二次ミャンマー投資ブームが到来し現在に至っています。そして、2015年総選挙が行われ、アウンサンスーチー氏が党首を務めるNLDが圧勝、第一党となり、軍事政権から政権を移譲されることとなります。しかし、2008年に制定された憲法に基づいて、アウンサンスーチー氏は、大統領とはならず、国家最高顧問に。また憲法に基づいて設置されている国会では、上院にあたる民族代表院も、下院にあたる人民代表院も議員定数の4分の1は、国軍司令官により指名される（民族代表院：224人。うち56人が軍司令官による指名枠。人民代表院：440人。うち110人が軍司令官による指名枠。）こととなっており、これによって、新政権も軍との関係をうまく構築させながら政権を運営しなくてはならないのが実情である。

②ヤンゴン（旧首都）の概要

ミャンマーの旧首都で、ヤンゴン管区の州都であるヤンゴン（旧名称はラングーン）は、国内最大都市であり、エーヤワディー川のデルタ地帯に位置しています。人口は736万人（不確定）、総面積576平方キロメートルのまちです。ここには、約2000人ほどの日本人が生活をしています。

季節は、次の3シーズンに分けることができます。

☆ 暑季 | 2月下旬～5月中旬

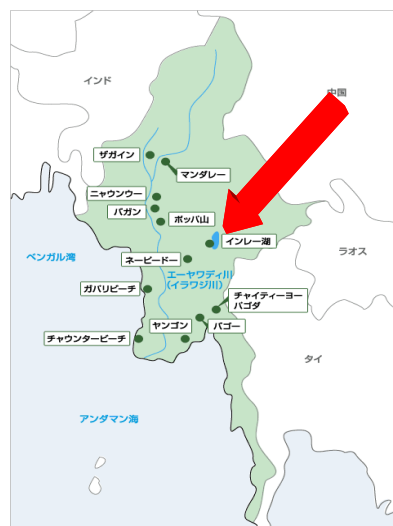
最高気温の平均40℃前後・最低気温25℃前後

☆ 雨季 | 5月下旬～10月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温22℃前後

☆ 乾季 | 10月下旬～2月中旬

最高気温の平均30℃前後・最低気温15℃前後



赴任時期が4月上旬なので、1年で一番暑い時期に赴任することになりました。ただ、学校の職員室や教室、自宅や車の中、商業施設内はエアコンが完備していますので快適に過ごすことができました。しかし、電力不足により、1日に数回ある停電、不定期の計画停電などがあり、コンドミニアム等では発電機を完備しています。

月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	年
最高気温記録* C(°F)	37.8 (100)	38.3 (100.9)	39.4 (102.9)	41.1 (106)	40.6 (105.1)	36.7 (88.1)	33.9 (93)	33.9 (93)	34.4 (93.9)	35.0 (95)	35.0 (95)	35.6 (96.1)	41.1 (106)
平均最高気温* C(°F)	32.2 (90)	34.5 (94.1)	36.0 (96.8)	37.0 (96.6)	38.4 (99.1)	30.2 (86.4)	29.7 (85.5)	29.6 (85.3)	30.4 (86.7)	31.5 (88.7)	32.0 (89.6)	31.5 (88.7)	32.3 (90.1)
日平均気温* C(°F)	25.1 (77.2)	26.9 (80.4)	28.8 (83.8)	30.7 (87.3)	29.2 (84.6)	27.4 (81.3)	26.9 (80.4)	26.9 (80.4)	27.3 (81.1)	27.9 (82.2)	27.2 (81)	25.3 (77.5)	27.5 (81.5)
平均最低気温* C(°F)	17.9 (64.2)	19.3 (66.7)	21.6 (70.9)	24.3 (75.7)	25.0 (77)	24.5 (76.1)	24.1 (75.4)	24.1 (75.4)	24.2 (75.6)	24.2 (75.6)	22.4 (72.3)	19.0 (66.2)	22.6 (72.7)
最低気温記録* C(°F)	12.8 (55)	13.3 (55.9)	16.1 (61)	20.0 (68)	20.6 (69.1)	21.7 (71.1)	21.1 (70)	20.0 (68)	22.2 (72)	21.7 (71.1)	16.1 (61)	12.8 (55)	12.8 (55)

2 ヤンゴン日本人学校の概要

①ヤンゴン日本人学校は、昭和37年（1962年）、多くの日本人が集まり、「日本人の子どもにもきちんと学習をさせる場所をつくろう。」という意見があがり、ある会社の住宅の一部屋を借りて、補習授業が始まりました。しかし、教員数が足りず、毎日通学することができたのは、4年生以上の子どもたちだけでした。

3年生以下は、インターナショナルスクールに通いながら、週に1、2回だけ「ラングーン日本人補習校」に通っていたそうです。

2年間の補習校の後、昭和39年（1964年）6月3日、世界で2番目の日本人学校がビルマに設置されることとなります。その後、昭和47年（1972年）4月に、学校名が「ラングーン日本人学校」になりました。1989年から、国名が「ビルマ」から「ミャンマー」に変わり、首都の名前も「ラングーン」から「ヤンゴン」に変更になったため、同時に学校名も「ラングーン日本人学校」から、現在の「ヤンゴン日本人学校」になっています。そして、平成2年（1990年）より現在の場所に設置されています。



在ミャンマー大使館附属ヤンゴン日本人学校

設置者：ヤンゴン日本人会

運営主体：ヤンゴン日本人学校運営委員会

※「大使館附属」となっているのは、現地の法律では「外国人」および「外国企業」などは不動産を取得、または現地法人を設立することができないため、大使館を通じてミャンマー政府より土地を借用しているためである。



平成28年7月現在

	幼稚部				小学部							中学部				小・中計	総計
	年少	年中	年長	計	1年	2年	3年	4年	5年	6年	計	1年	2年	3年	計		
男子	3	11	6	20	11	10	17	13	6	8	65	11	3	3	17	82	102
女子	3	4	5	12	9	4	10	9	9	5	46	4	6	1	11	57	69
計	6	15	11	32	20	14	27	22	15	13	111	15	9	4	38	139	171

平成28年度以前の児童生徒数の推移

年度	小	中	合計	年度	小	中	合計	年度	小	中	合計
昭和39年	12	0	12	平成元年	8	4	12	26年	86	17	103
40年	13	3	16	2年	10	3	13	27年	107	20	127
41年	9	2	11	3年	15	1	16				
42年	6	0	6	4年	17	1	18				
43年	10	2	12	5年	19	0	19				
44年	11	0	11	6年	21	2	23				
45年	15	0	15	7年	28	6	34				
46年	14	0	14	8年	24	8	32				
47年	11	2	13	9年	27	9	36				
48年	6	0	6	10年	39	12	51				
49年	7	0	7	11年	35	9	44				
50年	11	3	14	12年	37	8	45				
51年	11	4	15	13年	30	3	33				
52年	11	2	13	14年	40	4	44				
53年	11	3	14	15年	39	8	47				
54年	17	3	20	16年	42	7	49				
55年	21	3	24	17年	33	9	42				
56年	26	5	31	18年	36	10	46				
57年	26	5	31	19年	25	10	35				
58年	23	3	26	20年	30	3	33				
59年	24	6	30	21年	38	2	40				
60年	28	5	33	22年	35	10	45				
61年	21	5	26	23年	33	11	44				
62年	27	5	32	24年	43	14	57				
63年	19	3	22	25年	69	18	87				

幼稚部 小学部 中学部 を併置し教育活動を行っています。また、その特性から、幼小中の連携を授業の中で行う、また小学校1年生（一部）から教科担任制としています。教職員みんなで子どもたちを育てるという意識で行っています。

○50周年記念行事の様子



第1部の司会は、生徒による日本語、英語、ミャンマー語の3か国語で同時に行いました。



中学年”Go Go Ninjya”では忍者の服装で、マット運動や跳び箱運動を行いました。



中学部”書道パフォーマンス”では日緋の絆をテーマに一文字入魂。



全校合唱では童謡ふるさとを、日本語とミャンマー語の2か国語で歌いました。



メアリーチャップマンスクール(聾学校)生徒によるミャンマー伝統舞踊。



養護施設ドリームトレインの子供たちによる、歌とダンスパフォーマンス。

②施設的な課題

平成26年(50周年の節目の年)に、児童数増加を見込み、2階建ての新校舎が落成されました。この新校舎1階には、4つの通常教室(40名学級)と特別教室、2階には体育館としても使用できる講堂があります。

しかし、急激な児童数が見込まれる中、教室不足のため2017年度は幼稚部(年少)の募集を停止、平成31年度に新たな校舎建設に向けて、計画を進行している状況にあります。

	年度	小	中	計	前年比
2011	23年	33	11	44	97.8
2012	24年	43	14	57	129.5
2013	25年	69	18	87	152.6
2014	26年	86	17	103	118.4
2015	27年	107	20	127	123.3
2016	28年	111	38	171	134.6
2019	31年度	250	85	335	131.7

○新校舎建設の様子



僧侶を招いての地鎮祭。僧侶と参列者のコールアンドレスポンスが続きました。



建設予定地は本校テニスコート。3回ほど児童生徒とテニスを楽しみました。



連日30人以上のマンパワーで土台が作られ、竹で足場を組みながら作業を行いました。



2016年度途中より新校舎の使用を開始しました。2階立て鉄筋コンクリート1階40人教室4部屋。家庭科室。2階アセンブリーホール(講堂及び体育館)



現在敷地内に350人規模の生徒数に対応できる新校舎をさらに建築中。完成は2019年度予定。(地上3階、理科室、普通教室6部屋)

③特色ある教育活動

○日本人として(日本を知る)

本校に学ぶ子どもたちは、生活言語がミャンマー語であったり、日本での生活経験が少なかったりする子が珍しくありません。多様な生活背景をもつ子どもたちに、日本人としての資質を養い、日本語力を高めることは本校の教育課題の一つです。そのため、「朝読書」や「1分間スピーチ」に取り組んでいます。2月に行われる「弁論の会」は、ミャンマーで考えたことや自分の夢などをテーマに、児童生徒がスピーチする伝統行事です。(27年度より、小学部6年～中学部3年生までで実施)。



5月、こどもの日集会 全校児童生徒のメッセージをこいのぼりのうろこにまとめました。



7月七夕集会 図書委員会が中心となって七夕まつわるエピソードをクイズ形式で全体に発表しました。また玄関には全校児童生徒の短冊が笹の葉に飾られました。



9月 お月見集会 ミャンマーは満月の日が休日となっています。



休み時間 自作の百人一首の札を使って、カルタ大会。



1月 運動会 冬休み明けの乾季に、園児、児童、生徒約200名が参加しました。



7月 宿泊体験学習に向けての学年集会 少人数の中、集会の大切さを学びました。



8月 航空教室 ミャンマーとの日唯一定期便を持つANAが航空教室を行いました。



7月 安倍首相夫人表敬訪問 日本人学校を始め現地校の視察に来ていただきました。



ミャンマーでは四季を感じることはなく、日本の学校を経験している子どもたちと、まったく経験のない子どもたちも、日本の伝統や文化を感じるために、行事を設定している。また日本からの表敬訪問をする団体や個人の受け入れ先として、不定期に様々な行事が行われている。

○国際人として(世界を知る)

ヤンゴンには、現地校、インターナショナルスクール、フレンチスクールなど各国の教育施設があり、多くの子どもたちが学んでいます。これらの子どもたちとの交流活動は、子どもの世界観を広げる上で貴重な体験となります。本校では、文化・スポーツ交流を中心に「大切にしよう 小さな出会い」を合言葉にした国際理解教育を推進しています。その代表的なものが、本校最大の行事「チルドレンズフェスティバル」です。各国の子どもたちによるステージパフォーマンスと日本人学校児童・生徒による日本の伝統文化紹介が行われます。また、隣接している聴覚障害児のための現地校「マリーチャップマン校」などの児童生徒を招待して「サッカー大会」を行っています。



建設予定地は本校テニスコート。3回ほど児童生徒とテニスを楽しみました。



在緬法人のゲストティーチャーを招いて、生き物教室が行われました。



養魚池へ訪問 たもや投網を使って水辺の生き物採集をしました。



日本の ODA で作られた浄水場へ訪問 JICA 専門家の説明でくみを学びました。



日緬友好 60 周年サッカー親善試合 S 大阪 VS ミャンマー代表との一戦が行われました。



メアリーチャップマン校 (ろう学校) へ訪問 手話や折り紙で交流しました。



現地 CM を用いた道徳の授業 屋内 CM を題材に、思いやりの授業を行いました。



チルドレンズフェスティバル 現地教科書の物語を和訳して劇を行いました。



現地メディア (新聞、TV など) で日本のニュースが報道されています。



ミャンマーでも中国の勢いが見られ、国慶節にはヤンゴン市内のタンゼイ (チャイナタウン) では華やかな飾りが見られます。仏教国ながら、キリスト教徒、ムスリム、ヒンドゥー教徒が多くみられ、100 以上の少数民族が暮らす他民族、他宗教国家として日本では見られない日常を実感することができました。

○社会人として(世の中を知る)

進路指導・キャリア教育、現地理解学習の一環として、社会体験を大切にしています。現地の事業所（工場等）の見学や体験学習を通して、現地の様子や日本との関わり、自分の進路などについて考える機会とします。中学部宿泊体験学習では、マンダレーやバガン王朝の遺跡やパゴダを見学したり、JICAの協力でバガン近郊の農園での体験学習をしたりしました。小学部5、6年生の宿泊体験学習では、現地の子どもたちと交流のほか、アサヒ飲料関連のジュース工場の見学や国立文化芸術大学での人形劇体験、伝統の陶器工房での製作体験を行いました。また、現地理解学習として、低学年の生活科では学校スタッフ（ミャンマー人）とチンロン遊びを行い、3年生の社会科では、学校のまわりの地図づくり、4年生の社会科ではショッピングモール見学などを実施しています。（常に治安面を考慮に入れて、実施の有無を決定しています。）



○中学部 宿泊体験学習の実践

- ①2014年度「限界を超えろ」～ワチェ慈善病院で働く日本人から生き方を学ぶ～
- ②2015年度「ADVANCE～為せば成る、為さねばならぬ何事も～」
～ニャウンウー地区（乾燥地域）で農業支援を行う JICA 専門官から生き方を学ぶ～
- ③2016年度「一致団結」～ワチェ、ピンウーリン、ゴッティ鉄橋～

内容

2-① 2014年度宿泊体験学習ルート3泊4日（ミャンマー北部 マンダレー～ザガイン～ピンウーリン）

NPO 法人ジャパンハート ザガイン管区 ワチェ慈善病院における職場体験学習（1泊2日）

ワチェ慈善病院…約20名の日本人ボランティア医師・看護師および、ミャンマー人医師・看護師による農村部低所得者層の為に開かれた診療所

○処置室用ガーゼ織体験、医師、看護師の仕事の様子の見学、入院患者さんとの日本の遊びを通して日本文化の交流

○体験学習後、夕食を診療所スタッフとともにレクレーション及び座談会



2-② 2015年度宿泊体験学習ルート2泊3日（ミャンマー北西部 バガン～ニャウンウー～ポッパー山）

JICA 農業支援プロジェクト マンダレー管区 乾燥地域による農業体験学習（1日）

○日本人3名の JICA 専門家がミャンマーの乾燥地区（ニャウンウーウー地区）における農作物の安定栽培及び供給、農家の安定収入を目指し、ミャンマーの農業省とともに行うプロジェクトの見学及び農業体験学習。

○ひよこ豆、落花生の植え付け及び、防風林の植樹、牛による開墾の見学

○植樹体験後、昼食をスタッフとともにとった後に座談会。



3 3年間の成果と課題

①成果

- ・ミャンマーで活躍する日本人の生き方に触れることができた。
日本では容易に交流することができない、公的機関、NPO法人、一般企業での駐在者などとふれあうことを通して、海外で活躍する人々がどのような思いで自分の仕事に向き合っているか生の声を聴くことができた。人の生き方に触れることで、子どもたちが自らの進路選択を行う一助となっている。
- ・ミャンマーの人々の生活習慣、文化、考え方に触れることができた。
日本におけるミャンマーの情報は少なく、敬虔な仏教国で長期間、海外から経済制裁を受けたことで貧しい国になったというイメージを持っていたが、若者の多くが、スマートフォンを持ち、SNSで自由に情報を共有、拡散している。至る所に、キリスト教の教会やヒンドゥー教の寺院、イスラム教のモスクなどがあり多民族、多文化、多宗教社会であることがわかった。
- ・異年齢集団で活動をすることができた。
中学部全体（中学1年~3年）で30名在籍しており、総合的な学習の時間を中心に、中学部単位での活動を日常的に行っている。この活動の集大成が宿泊体験学習として位置づけられ、中学部内で縦割り班を形成しながら、異年齢集団の活動を積極的に取り入れた。少人数でのデメリットを補い、それぞれの責任と自覚を持たせながら、見通しを持った活動を積極的に行うことができた。

②課題

- ・宿泊体験学習実施におけるリスクマネジメント
日本国内の宿泊体験学習では教育計画に基づき、旅行業者や過年度までの実績をもとにコースを選定している。ミャンマーでは情勢の変化により、前年度と同様のコースを採用することが難しく、国内の旅行業者も教育旅行の実績がないため、担当職員の足と目と人的ネットワークでコースを選定しているのが現状である。これまで大きな問題は起こらなかったが、日本と同等レベルのリスクマネジメントを行うことは困難を極めた。
- ・国際結婚家庭や海外在住期間が長い児童生徒への対応
学年により状況に差はあるものの、父親または母親がミャンマーを含む国際結婚家庭の割合が増えてきている。低学年では、家庭学習の取組や、高学年に向けた進路指導について、学校と家庭のコミュニケーションを取ることが難しく、子どもたち自身も学校と家庭で使用している生活言語が異なり、国語力に大きな配慮が必要であった。

4 おわりに

日本の将来を担う人材がヤンゴンから世界へ飛躍していくことを想像するだけで高揚感でいっぱいになる。在外において様々なことにひたむきに取り組む子どもたちと時間を共有できたことは何物にも代えがたい貴重な経験になった。3年間の任期を無事勤めあげることができたのは、関係各位の協力の賜物である。ここに改めて感謝申し上げたい。

昨今、地球温暖化により日本の環境も大きく変化しており、東南アジアで経験したさまざまなことを今後の教育活動及び日本での日常生活に生かせるよう、日々研鑽と修養に努めてまいりたいと考えている。

